

---

# 学校の軋む重さ

ん？ん？ん？ん！！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学校の軋む重さ

### 【Zコード】

Z58401

### 【作者名】

ん？ん？ん？ん！！

### 【あらすじ】

無事に【此処】という場所から抜け出した僕たちは、何でも屋を開く事にした。特に宣伝をしなくても、僕の周りには【能力者】が集まつてくる。ある依頼によって、僕達は学校に忍び込む事になった。格好良く言えば潜入調査というやつだ。【能力者】とばれないように、栄<sup>しあり</sup>は何度も繰り返し言い聞かせてくる。僕はどんな形であれ、もう一度学校に通える事が嬉しかった。

【世界の狂つ重さ】といつ小説の続編です。前作を読んで頂けると嬉しいのですが、いかんせん200話と長いので、抑えておいて欲しい要点だけ簡単に纏めます。

- ・【能力】というものがある。それは常識としてはありえないからである。だから【能力者】は捕まつて施設へと送られる。
- ・【能力】を得る代わりに、【代償】も同時に持つ事になる。
- ・主人公は茉莉<sup>まつり</sup>。一緒にいる女の子は栄<sup>しおり</sup>。栄は男みたいな喋り方である。

よろしくお願ひいたします。

## 序

悲惨な光景だった。

目を背けようとした僕に、栄の叱咤の声が聞こえる。

「これは君が招いた事だろう。目を逸らすな。だから私は関わるなと言つたんだ。それを無視した結果だよ。君は責任を持つて見届ける義務がある。ある意味君が起こしたともいえるこの事態をね。」

改めて僕は辺りを見回した。

複数の人間が、呻き声をあげながら横たわっている。血を流している者もいるようだ。

僕は彼らの名前も知らない。否、本当は知つてはいる筈だ。

だけど思い出せないのだ。覚えようとしなかったから。

視線を正面の壁に移して、この状況を作り出した張本人を見る。彼は怯えていた。頭を抱えて震えていた。

「違う。僕はこんな事をしたかった訳じゃない。僕はただ。僕は……？」

「……」

「僕は？自分の気持ちに嘘をついてはいけないよ。君は心の底ではこうなる事を望んでいたんだろう？ずっとこうしたかったんだろう？」

「？」

栄が話しかける。いつもの口調に戻っていた。

「五月蠅い！！黙れ！！お前に何が分かる！！」

「分かる訳がないだろ？？そうやつて怒鳴つていれば誰かが助けてくれるとでも思つてているのかい？」

そんなに近寄つたら危ないんじやないか？栄があまりにも突つかかって行くので、僕は心配になつた。

彼の【能力】が何かも、よく分かつていないのに。

不用意に近付けば、栄も傷付けられてしまうかもしれない。床で呻

いている人たちのようだ。

僕の心配を知つてか知らずか、しかし栄は何かの宣告のようにさりげに男に続けた。

「君は選ばなければならぬよ。このままじでじつと震えているのか。それとも……逃げるか？」

「…………逃げる？」

「そうだよ。当たり前じゃないか。このままじつとしていても君は必ず捕まるよ、【特殊警察】にね。君の【能力】なんてちつぽけなものなんだから」「ら

「ちつぽけだと！？」

ぎろりと栄を睨みつける男。

「ああちつぽけさ。試してみるかい？」

栄は不敵にもそう答えた。

いつものように目が覚めた。

いつものようにことは言つても、普通じゃない目覚めの方が珍しいのだから、毎日毎日「ひつひつ風な事を思つ僕は何かおかしいんじやないだろうか。

かといって、いつもと違つて覚めなんて、もつて一度と体験したくないのだけれど。

この家で暮らし始めるよつになつて、一週間になる。  
いたつて普通の家だつた。

仮にも僕らは追われている身なのだから、もう少し隠れてすゞした方がいいんじゃないかと思つて栄に聞いてみたが、

「いや、心配する事はないと思つ。あの男も自分のミスは隠しておきたいだろからね。上司の記憶を書き換えるんじやないかと思う。追っ手が来るとしても、それは奴が個人的にやとつた者だろ。おそらく、ね」と返された。一応その時は納得したものの、僕はいまだに不安だった。

目覚めが普通である事を毎日確認するのも、きっとそのせいなのだろう。たぶんきっと。

洗面所で顔を洗い、タオルで拭く。

階下でテレビがぶつぶつ言つているのが聞こえる。どうやら栄は一回にいるらしい。相変わらず驚くほど朝が早い。

栄と一人でこの家に住んでいる訳だが、栄は何とも思つていらないらしい。

仮にも僕は男なのに。少し心外ではあった。

これも毎朝思う事だが、なかなかいい家だった。勢いで出てきたのはいいけど、暮らしをどうするかとかは全然考えていなかつたので、実に助かる。栄は「別にいいよ」と言つてくれているが、いつかお金を返さなければ。

この家は、栄が全部お金を出している借家だ。

唖然としている僕に対し、

「給料だけはよかつたからね、金はそれこそ腐るほどある。講座が止められていないか、それだけ心配だったけど、どうやら問題ないようだ」

と当然のように栄は言つた。

1階のドアをガチャリと開ける。

「ああ、おはよう栄莉君」

「おはよう。何を見ているんだ? 栄がテレビを見るなんて珍しいね」「珍しいかな? ..... やつと生活が落ち着いて来たからね。余裕が出来たんだろ?」

「ふーん。で、随分熱心に何を見ているんだ?」

「ああ、君も見てくれよこのビデオ」

ビデオかよ! ! と突つ込みそうになつたがこらえた。【カメラが捕らえた大自然の驚異! !】という、まあよくありそうな特番だった。

「どれどれ? .. これがどうかしたのか?」

「まあね。こいつのつて、誰も死ななかつた場面を使つものだろなつたんだけどね」

「う~」

「やうなのか?」

「... そなうなんだよ。でもこれは、死んでるんだよ。司会者があまりにもあつさりと「死傷者は5人です」というから、聞き逃しそうになつたんだけどね」

熱心に見ている栄には悪いが、僕はあまり興味を抱かなかつた。

「このテレビ局は、大丈夫なのかな？苦情とか凄いんじゃないかな？」

うむ、興味深い

一人」という栄を横目に、朝食の準備に取り掛かった。

「……栢もトーストでいいのか？」

テレビを真剣に見ていてる栄に問う。

「ああ、よろしく頼むよ」

「ん、分かつた」

パンにチーズを置きながら、こまかにまわす。そのままではまずいよなあと思つ。

僕も栄也料理がほとんど出来ないからだ。

い、までも夕食で湯ま湯といふ語はもいかないだ

卷之三

まかまかと湯気を立てるパンを乗せた食器を、机に置きながら書く。

「駄目だ」

にべもなく書つて。視線はテレビに向ひたままだつた。

「同じだよ。お前はもうアーディトから離れてるわ」

「お金の問題じゃねーんだよ！」

パンを皿から下へ取つ、上の手で業の刃を握て葉は焼ナ。

「本領で別」——「じゃなーか。若こいがい

卷之二

あつ、とパンを一度皿に戻しながら、栄は僕に対して呆れた顔を

向  
け  
た。

「あのねえ。君は勘違いしているよ。私達を追いかけているのは、決して殺し屋じゃないんだから」

「でも」

「それよりも怖いのは、人と深く関わつて、顔を不用意に覚えられ

る事だ。だから適当に店を選んで外で食べてればいいんだよ。酔い

事やバイトの類いは、だから積極的に避けるべきだ

「……」と「一ヒーを啜りながら茉はそう続けた。

「でも……」

「でも？」

特に何も考えてなかつたので、栄に聞き返されて少し焦る。

「…………でも、どういう形であれ人と関わっていかなきや、あくべつ亞空達

の居場所の手がかりが掴めないじゃないか」

「はん。君は【特殊警察】の持つ【施設】の情報を、料理教室の先生が知っているといふのかい？」

「そうじゃなによ。そうじゃなにナゾ……」

「とりあえず、君も早く座るといい。せっかくのパンが、冷めてしまうよ」「あつま

何か言い返したいのに、何も言えないまま、僕は栄の向かいに腰を下ろした。

そんな僕の目を覗き込んで、

「何よりね、君の【代償】の事があるだらつ。のんびりできる内は、精一杯のんびりしておくれのが一番だよ」と栄は言った。

「ヒーリーで茉莉君。頼んでいたものは出来たのかい?」「すず、ヒーリーを一口啜ると、茉莉が聞いた。

「頼んでいたもの?」

「…………まあ出来てなくても、そんなに変わらないんだけどね」  
そう言いながらも、心底呆れたような目で僕をじっと睨む茉莉。  
うーん、忘れているんじゃない、急に問われたから聞き返しただけ  
なんだけどなあ。今更言つと嘘っぽくなるか?

「いや、出来るよ」

「ふーん、何が?」

「何がって、だからホームページだろ?」

「…………何の?」

「何でも屋のホームページだよ」

「…………何でそんなものを作ったんだい?」

その理由は僕より茉莉の方が詳しいと思うんだけど。茉莉は怒つてしまつたのか、執拗に質問を並べてくる。

「…………機嫌を直してくれよ茉莉。朝っぱらからそんなに怒つてると

しづが増えるぞ、と続けようとしたが、それがやぶへびになるだろう事ぐらいはいくら僕でも分かったので、出しけた声を引っ込んだ。

「…………怒つてると?なんだい?」

「いや、何でもないよ。それよりもホームページを作った理由は僕が聞きたいくらいだ」

「そのくらい自分で考えなよ」

「…………いや、考えただけじゃ。せめて検索サイトぐらいには登録しないか?」

僕達のサイトはこのままの設定だと、せっかく作ったにも関わらず、

某有名検索サイトだけじゃなく、あらゆる検索に引っかかるらしい。

直接URLを打ち込むくらいしかアクセスする方法が無いのだ。それならば何故ホームページなど作ったのだろう。

「だめだよ。さっきも言つただろう、あまり露出すべきではないと

「でもアクセスする方法が無いじゃないか」

「それは考えてある。ほら、コレ」

と言つて差し出したのは、昨日の日付の夕刊だった。わざわざ置つて来たらしい。

栄の指が指す部分を見る。【あなたの悩み、何でも聞きます。詳しく述べこちらへ】という文字の後にURLが書いてあった。

「これで十分だよ

「いやいや、こんな一行の文、見逃しちゃうよ」

僕がそう言つと、栄はあからさまに溜め息をついて言つた。

「あのねえ茉莉君。君はもつと【代償】というものを理解しなくてはならないよ。断言しよう。身の回りに【能力】関係のいざこざがある人間は、無意識のうちにホームページにアクセスしてしまつ筈だ

結局今日も一日これといった変化を見ないまま、夜を迎えた。  
このままで本当にいいのか、と未だに悩み続ける僕の隣りでは、栄  
が本を読んでいた。

### ピンポーン

とこうどじか間の抜けた音が家に響いた。

栄も僕も、数秒の間ぽかんとしたまま固まっていた。

もう一度音がなってようやく、それがこの家のチャイムだという事  
に気付いた。

鳴らす必要がなかつたので、この家に住んで一週間にもなろうとい  
うのに、今まで聞いた事がなかつたのである。

「…………心当たりは？」

栄が、弱冠の緊迫感を伴なつた声で聞いてくる。

もちろん、僕にはなかつたので、黙つて首を振る。

「ふむ。出るべきが出ざるべきか。普通に考えれば居留守を使つた  
ほうが得策だとと思うんだが、君はどう思う？栄莉君」

「…………仮に。もし仮に奴の差し金だとしたら、居留守を使った所  
で、ドアを壊して入つて来るんじゃないかな？」

「…………かもしれないね」

「それに、関係なかつたとしても、こには僕は出ておべべきだと思  
うよ。近所付き合いとかもあるし」

「だから。近所付き合いはしない方がいいんだよ」

「それは違うよ栄。まったく無視していた方が、帰つて目立つ事も

ある。ある程度はしておくれ方がいい」「

ピンポン

と急かすよつにまた音がなる。

「…………まあどうやらにじみ、これだけ煌煌と明かりをつけているのだから、留守とこいつのは苦しいか。出てくれるかい? 茉莉君」

茉の言葉に頷いて、僕は玄関へ向かった。

…………びひょ。

まずは覗き穴から姿を確認するのがいいだろつか。

玄関に着いたはいいものの、僕はまだ扉を開けられずにもたもたしていた。

「…………」

自分でも用心しすぎな気もするが、覗き窓に先に手を翳す事にした。覗こうとした途端に目を突かれたら洒落にならない。この覗き窓が強化ガラスで出来ているのだとしても、相手がどんな【能力】を持つているか分かつたものではないのだ。

ある程度の痛みを覚悟したが、当然のように何も起こらなかつた。

ぴんぽーん

と更に呼び出し音が重なつた。意外としつこいな。いないとは思わないのだろうか。隣人とかならもう諦めてもいいと思うのだが。やつぱり普通の人ではないのだろうか。

おわるおわる、外を見る。

「…………ん？」

一瞬氣を抜きそうになつた自分を叱咤する。相手を外見で判断してはいけない。

扉の外では、どこかの学校の制服を着た女の子が、困った様な顔で呼び鈴を見つめていた。

ますます意味が分からぬ。家を間違つてゐるんぢやないか？  
ご近所さんだとして、制服くらいは着替えてくるだらう。

ひんぽーん

と再びの音。制服の女の子はおかしいな、とでも言つたげに首を傾げている。

その様子は、居る事を確信しているように見えた。

このまま一人で悩んでいてもらちが明かない。僕は多少の危険を犯しても、ドアを開けてみる事にした。

「いつこう時なんて声を掛けていいのか、僕は分からなかつた。

知り合いなら「いらっしゃい」とか「よく来たね」とかだろ。知らない人でも、新聞屋とか、配達員とか、もう少し分かりやすい格好なら対応のしようもあるのだけれど。

目の前の女の子は、知り合いでもないし、分かり易い格好でもない。否、分かり易いと言えば分かり易いのか。制服なのだから。コスプレとかでない限り目の前の人間は学生だろ。……もしかすると宗教の勧誘だらうか？その可能性はあるかも……いやないか。どちらにしろ制服というのが引っかかる。

「……何のようですか？」

結局僕は、そんな何とも言えない微妙な言葉を発した。

「あの～、この家人ですか～？」

控えめに、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、女の子は質問に質問で返してきた。

それにその質問は何なんだよ。僕が泥棒にでも見えたのか？

「あー、まあそうですけど。何のようですか？家間違えてないですか？」

一番有りえそうな可能性を提示する。

「いえ～、それはそのう～、間違えてないと思うんですけど～」  
声が小さい。語尾が聞こえにくい。僕は別に気にしないが、こんな話し方をしていたら、頑固親父とかに怒鳴られるんじやないか？知らないけど。

「でも、僕はあなたの事を知らないんですけど。何のようですか？」  
栄の知り合いだろうかとも考えたが、こちらから名前を出す気にはならなかつた。

「え～、だつて知らないのは当たり前じゃないですかあ～？初対面なんですから～」

だから。それをさつきから聞いているのだ。初対面なんだつたら、なお更何の用だか分からない。

「だから、何の用ですか？」

少し声が大きくなつてしまつた。僕は結構氣の長い方なのにな。

女の子はびくつとして、ますます声が小さくなつた。

「え～、お客さんにそんな大声出していいんですかあ～？」

「お客さん？」

「何の事だ？」

「【茉莉何でも相談所】つてこ～で有つてますよねえ～？」

「それで？」

「それでつて？何がさ、栄」

僕がそう答えると、栄は歐米人のようなオーバーリアクションをした。

額に右手をあてて、溜め息を大きく一つ吐いたのである。  
呆れられるのはもはやいつもの事なのだが、ここまでやって見せる  
という事は、本気で呆れているという事をアピールしたいのだろう。  
うん、きっとそうだ。そんな事ばかり理解出来ても意味がないのだ  
が。

「それだけの会話で、君は彼女を信用して家にあげたのかい？」

「……いや、だつてさあ

だつてとは言つたもの、確かに少し迂闊だつたかもしない。ドア  
を開けるまでは自分でも呆れるほどに慎重になつていたのに、扉を  
開けた途端　というより訪問者の姿を確認した途端……それも違  
うか、彼女と話している内にだんだん　何だか気が抜けてしまつ  
たのだ。

「だつて？」

ちら、とドアを見る。今彼女はトイレに行つてゐる。訪問して直ぐ  
にトイレを借りるというのは些か疑問なのだけど。まあそのお陰で  
こうして栄と相談できているのだからよしとしよう。まだ帰つてく  
る様子はない。それでも僕は声が大きくならないように続ける。

「そんなに危なそうな子には見えないし」

「……君はもっと慎重な人間だと思ったんだけどね」

「うん、僕もそう思うよ。見た目で判断してはいけないとも思つて  
たんだけど、話している内になんだか気が抜けてきちゃって」

「……彼女がかわいいからかい？」

「うん？」

いや、まあ、かわいいかわいくないかで言つたら、間違いなくかわいい部類に入るだろうけども。

「いや、そういう事じゃなくて」

「まあいいよそれは。冗談だ。私が懸念しているのはそんな事じゃない。よく考えてみる、何故彼女はこの家の場所を知っている?」「……? ホームページ見たからだろ?」

「君は本物の馬鹿か?」

随分な言われようだつた。僕が答えを導き出すのを待たずに栄は続けた。

「あのね茉莉君。私も君が作ったホームページを見てみたんだがまあ出来栄えについてはあとから議論するとしても 住所は書いてなかつたように思つんだが。それとも私の見た後に書き足したのかい?」

そういうえば。連絡先は書いたが、住所は書いていない。連絡先も僕の携帯の番号だ。

家の番号を書いたのなら、それを調べて辿つてくる可能性もあるが、携帯ではそれも不可能だらう。

「やつと分かつたみたいだね。今この状況で現れる依頼者の異様さが」

栄がそう僕に諭すように言つたのと同時に、リビングのドアがガチヤリと開いた。

「湊渡ゆかりくみなとゆかり」です」

女の子 湊渡さん はそのまま「紹介をした。尻すぼみの、やはり聞こえにくい声で。

「……………片瀬栞くかたせしおり」だ」

礼儀として、栞も自己紹介を返した。但し偽名で、だ。片瀬というのは本当の名字はない。らしい。本当の所は教えてくれないから分からないのだけど。これから活動していくに際し、名字が無いとうのはあまりにも不便だから、適当にその時読んでいた本の主人公から拝借した名字である。

「同じく、片瀬茉莉くかたせまつり」です」

栞に続き、僕も自己紹介をする。自分から教えたがらない栞に対し、僕は名字を覚えていない。あの時記憶を思い出したけれども、その中に名字の情報は入っていなかった。そんな大事なものを忘れるわけがないとも思う。でも僕にとって、名字はそれほど大事なものではなかつたかもしない。それどころか、憎むべき対象であつたのかも。…………止めよう。このまま続けていてもあまりいい方向に想像が進んでいく気がしない。それよりも今は、この目の前の湊渡という女の子の危険性について、だ。

「ええ～？一人は兄妹なんですかあ～？」

湊渡さんは、声だけは驚いたように言つ。声だけは、と表現したくなつたのは、その言葉を言う前と後に外見上の変化が一切見受けられなかつたからだ。指を肩口まである黒髪に絡めて、くりんとする作業？を繰り返している。

…………その姿は、やはりかわいい部類に入るだろう。先ほどは光量が足りずによく観察出来なかつたが、柔らかい蛍光灯の下で見る

彼女の顔は、漆黒の髪と比例してその白さを際立たせていた。白すぎる気がしないでもない。それはもう病的とも言える程に。太陽の光を浴びる事を忘れてしまったかのようだ。

「……そうだが。何か不満でも？」

「いえ～。不満なんてありませんよお～。あまり似てないなあ～って思つたんです～」

「そういう事は、思つても言わないようにするものだと思うけどね」「茉莉さん～。茉さん今日機嫌悪いんですかあ～？何だかずっと言葉で責められる気がするんですけどお～」

湊渡さんが僕に対して質問する。頼むから僕に話を振らないでくれ。……まあそういう訳にもいかないか。話に入り込むタイミングを与えてくれたと考えておこう。

「……いや、大体いつもそんなものだよ」

「そなんですか～。大変ですね～」

「慣れれば大丈夫だよ」

「……それに弟はMの気があるみたいだからね。私のこの口調を仕込んだのも実は弟なんだよ」

「そなんですか～」

「無いよ～！別に～！仕込んでもいないし～！」

初対面の人間に変な情報を吹き込むな。信じそうになつていいじゃないか。

それに僕が弟かよ～！

その後も数分に渡つて、いつものようなやり取りが続いた。僕は思わず、湊渡さんがそこに居る事を忘れそうになつてしまつた。

僕と茉のやり取りを、からからと湊渡さんは笑つて見ていた。

栄はそんな湊渡さんを、あくまで冷静に観察していた。

この人間は敵なのか、味方なのか、を見極める為に。

「……といひでね、湊渡君、ふいに。

「え？……君？」  
いきなり話を振られた事にも驚いたようだが、自分の名前を「君」付けで呼ばれた事の方が気になつたらしい。

だから助け舟を出す。

一気にしないでいいよ、湊渡さん。君だけで呼ぶのは栄の、その、

「はあ。そういえば茉莉さんのもれも仕込んだんですかあー？」

「違ひよー。」

誤解が解けていない。  
冗談かもしれないが、どちらにしろ困ったものだ。

「ああ、それでいいんだよ。依頼を聞く前にアーリントンも聞いて

おきたい事があるんだけどね、湊渡君」

どうでもはよくないのだけれど。

「うう、おまえの家に迷ひこなしてゐるつもつて、どうした？」

「…………なんですかあ～？」

別段警戒心を抱いたようにも見えない港渡さんが問い合わせる。  
ふむ。どのように質問するのか見ものだ。

「君は、この家の場所をどのようにして知った？」

直球だった。これ以上ないほどに直球だった。

「どのよひで、ホームページを見て来たんですよ～」

「それはおかしいね、この家の住所は書いてなかつた筈だ。そうだ

つたよね、茉莉君」

「そうだね」

「それは…」

明らかに困惑したように、言葉を濁す湊渡さん。

この返答如何によつては、平和な日常が崩れ去つてしまつ。

「えつとお～、それはあ～」

「それは？」

どんな些細な表情の変化も見逃すまいと、湊渡さんを半ば睨みつけるように見据える栂。

例え疚しい理由が無かつたとしても、そんな事をすると、聞かれる事も言えなくなってしまうのではないだろうか。

「ええつと～、あの～、あれですよ～」

「どれだい？」

逃がすつもりはないらしい。どうあってもこの場で、栂は湊渡さんがこの家を知っていた理由を突き止めたいと見える。

「ん～、あのうそれって絶対言わなきや駄目ですか～、どうでもよくないですか～」

「絶対だ。どうでもいい訳がない」

「え～とお～、…………。なら言いますけど～、偶然茉莉さんが外で話してゐるのを聞いたんですよ～」

「…………誰と?」

「…………」

そこで二人は暫し沈黙し、示し合わせたように僕の方を見た。

その可能性は限りなく低いとしても、もしかしたら本当かも知れない、という感じで、じとりと見る栂と、

縋るよひ、ひつすらと涙を溜めて僕を見る湊渡さん。

…………。

いや。いやいや。

そんな目で見られても。

なあ栄。いくらなんでも、いくらなんでも僕がそこまで間の抜けた行動をする訳がないだろ？

湊渡さんも。初対面の僕に、何を期待しているんだ。悪いけど、僕には色仕掛けは通じない。そんな上目遣いで見られた所で、どうという事はないのだ。

「……いや、覚えがない。悪いけどね、湊渡さん。僕達はこの町に引っ越して來たばかりだから、何でも屋を始めたという、そんな報告をわざわざするような知り合いはないな」

「だそうだ」

「…………」

「答えにくくなら、私が当ててあげようか

何を思ったのか、栄がそう言つた。ビニカ嬉しそうに、楽しそうに続ける。

「君は【能力者】だね。この場所も、君の【能力】で知つたんだ、そうだろ？？」

「い！いえ！いえいえ！ちつ、違いますよ～！何言つてる  
んですかあ栄さん～！」

僕でも嘘を取り繕つてはいるのが分かる程に、湊渡さんはあたふたと  
していた。

「…………あのせ、湊渡さん？」

おぞるおぞる声を掛ける。なるだけ刺激しないように笑をかけた。もりなのだが、湊渡さんは炊飯器を空けたら黒いアレが這い出してきたような顔をしていた。

もう少し柔らかく言いつゝと、曲かり角を曲がつたらお化けを見つけた時のような顔をしている。まあようは、とんでもなく驚いているのだった。…………そんな顔をされるとさすがに傷つくんだけど、僕も。

どのように誤魔化すかを考える余り、この部屋から僕の存在を失念していたとでもいうのだろうか。

「ひや、え、あ、はい！あ！！茉莉さん！！茉莉さんも言ってあげて下さい…！そんな筈ないじゃありませんか…？」

いや、だから。

僕の事を余り信頼しないでほしい。会つてまだ一時間も経つていな  
いのに、彼女が【能力者】ではない事を保障できる訳がないじゃな  
いか。

「茉莉君」

ふと、栄が僕に話しかけてきた。

「ん？」

「彼女はなかなか面白いかもしれないね」

「は？」

「君よりもリアクションが激しい人間がいたよ  
「そのぐらいいくらでも居るよ……そんな変な事で一位になりたくない！」

「いやあなかなかないよ。突っ込みの面白さは置いておくとして、  
そこまで他人の言葉に关心を抱える人間は珍しいよ？ それで、  
どうこう【能力】なのかな、湊渡君」

「いえ……ですから……私は……」

彼女が余りにも慌てているので、僕は何だか可哀想になつてきて、  
助け舟を出してあげる事にした。

「湊渡さん、勘違いしてるようだけど、僕達は君が【能力者】と知  
つた所で、間違つても警察に通報したりしないよ？」

湊渡さんは、僕が言つた事がすぐには理解できないようで、ポカンとしていた。

蘇つた僕のこの記憶が、アイツに植えつけられたものでないという保障はないが、【能力者】であるという事を知られるというのは、その人間に最大の弱みを握られる事と同義であるから、この反応も分からぬではない、か？

「【能力者】を発見せしものは、直ちに1×0に通報する事。これに背いた者はその背景事情に関わらず、懲役30年の刑に処す。なお、通報者の情報は秘匿される」とかなんとかいう特別法律があると、確か栢から教えられた気がする。聞いた時にも思ったが、改めて思い返してみると、とんでもない悪法だよなあ、これ。誰が【能力者】かなんて、自分からひけらかしたりしない限りまず分からないのだ。栢には他意が無いからよかつたものの、今の栢と湊渡さんを見ていても分かるが、魔女狩りが蔓延るんじゃないのかコレ？嫌いな人間を、何人かで強力して【能力者】だという事にしたり。：

実際どうなんだろうか。あの場所で目覚めてからこっち、【能力】持ち以外の人とともに喋つた事がないからよく分からぬ。すっかり世間ずれしてしまつたのだろうか、僕は。

「…………… そなんですか？……………。あ！…じゃなくって、私…違いますから…！【能力】とか知らないですしお！」

湊渡さんは、呆れる程に嘘が下手なようだった。よくこれで今まで

通報なりされていないものだと思う。

これまで誰もカマをかけなかつたのか、よっぽど友人に恵まれているのか、それとも最近【能力】が発現したのか、もしくはそれ以外かは分からぬが、彼女はとても危ういように思えた。

「下手すぎる嘘はみつともないよ、湊渡君。…………君の心配も分かるが、こっちにも事情がある」

おい、出会つて間もない子に喋るのか、栞？

慌てて栞を見る僕。とがめるよつた視線になつていただろつ。

「事情？」

「ああ、私達に通報するメリットがない。それに私がしようとしても、このお人よしが力ずくで止めると思つよ」  
僕は別にお人よしでも何でもないんだけれどね。

「メリット、ですか？」

「そうだよ。実はこの茉莉君も【能力者】なんだ。わざわざ仲間を売る必要はないだろ？？」

「ちょ、栞！？」

まるで自分は【能力者】じゃないような言い方をするなよ。酷くないか？

暫らく何か考えていた湊渡さんだが、よつやく落ち着いたようだつた。

「分かりました。茉莉さんを信じます」

…………僕を信じるのか。栞の事はどうなんだろ？…考えても詮無いことだが。

「それがいいね。それじゃあ依頼の事を話してくれるかい？」



## 13話 見つけて欲しいものー01

「えっ！？あのぉ～」

「ん？どうした？何を言ひよどんでいるんだ？君はそもそも依頼を  
しにこの家に来たんだろう？」

「ええ、はい～、まあ～そ～うなんですけど～、そのぉ～」

「何だろ～？何を言ひよどんでこるんだ？」

「ああ、【能力】の事なら別に言わなくともいいよ」

僕には検討もつかなかつたが、栄は何でもないよう答えるのを見  
て、なるほどと思つた。

「え？ そ～なんですかあ～？」

「そうだよ。君が何か言いたいのなら言えよといいし、何も言いたく  
ないのなら言わなければいい。実際の所、君が【能力者】であるか  
どうかも、まだ分からぬのだからね」

ここまで話の流れから、あきらかに彼女は【能力者】だろう。で  
も、それは湊渡さんの口からまづきり聞いた訳でもないし、言葉の  
上だけでもあやふやにしておこうとこう判断だ。

それでも湊渡さんは、どうか納得のいかなそうな表情で、しばりく  
何か考えるように黙つていたが、やがて口を開いた。  
「探して欲しいものがあるんです～」

「探して欲しいもの？」

僕がオウム返しすると、湊渡さんは困つたように頷いた。

「ほり茉莉君、話の腰を折るなよ。まだ彼女が話している途中じや  
ないか。それで？それはどういったものなのかな？」

「いえ、それが、分からぬんです～」

「分からぬ？」

「…………続きを」

「私の学校に、何か私にとつて大事なものがある筈なんです」

「それはなくしたつて事？」

「それも分からぬんです～」

「…………要領を得ないな。同級生に頼めばいいじゃないか。何も部外者の私達に頼む必要は無い」

「一応頼んではいるんですけど～。きっと友達には見つけられないものなんですよ～、そういう気がするんですよ～」

「ちょっと待つてよ湊渡さん。何か分からぬものを僕達に見つけて欲しいっていうの？」

「まあ、はい、そうなんですか～、何でも屋さんなんですよね～？」

結論から言つと、僕達は【学校にある何かはよく分からなければ大切なものを探して欲しい】という、掴みどころのない漠然とした依頼を受ける事にした。意外だったのは、こんな変な依頼なのに、栄が乗り気だった事だ。

具体的な内容をもつと詳しく話を聞こうとしたが、もう時間も時間なので、また後日という事になった。

送つていこうかとも思つたが、栄に無言で睨まれたので、それは止めておいた。確かに、彼女が敵でないと決まった訳ではないのだから、それは危険すぎるかもしれない。

「意外だつたよ、栄」

「ん？」

「湊渡さんの事を結構信頼してるみたいじゃないか。依頼を受けるのにも肯定的だつたし」

「信頼する訳がないだろ。何か勘違いしてるようだが茉莉君。私が彼女の依頼を受けようと思ったのは、彼女の事を信頼したからではなく、彼女の【能力】が非常に魅力的だつたからだよ」

「え？でも彼女の【能力】が何か分からないじゃないか。どちらか」というと、君が言わせなかつた節もあるし

「それでも大体の予想はつくだろ。……何かを【探す】という【能力】を持つ人間と有益な関係を築いておけば、後々皆を助ける時に便利だらう？」

「…………探すとはいっても、あんな漠然とした所までしか分からないんじや、あまり意味がない気がするけど」

「何を言つてるんだ君は。今は情報がほぼゼロの状態なんだよ？大きな前進じゃないか」

「でも」

「それにね、前に彼女に似た症状の男性と……」「会った」事があるんだが、漠然としたものでも探せるというのは、便利なものだよ」「……彼女の【能力】を利用するためには、手を貸すって事か？」

「そうなるね」

「そんな！ そんな不純な理由で」

「何が不純だ？ 馬鹿な事をいうなよ。誰かを助けた見返りに、何かを要求するのは当然の事だろう。無条件で他人を助ける人間などいない」

「そんな事ない。友達の頼みなら、無条件で聞く事もある筈だ」

「……第一に、湊渡君は絶対的に他人なんだが。その君のいう事も、その友達の【信用】を得る為にする事だろう？ 女性に優しくする男性も同様だ。女性の【愛情】や他人からの【評価】を得たいが為にそういう事をする」

「それは極論だよ。もつと他人を信用したらどうなんだ、栢？」

「できない」

「……」

「茉莉君、君はね、少し純粋すぎるよ。その年齢にして信じられない程に」

栢はそう言った。

「…………栄」

自分がそれほど純粹な人間であるとは到底思えなかつた。が、それを言つた時の栄がやけに寂しそうに見えたので、僕は思わず声を掛けた。

「何かな？」

そう答える栄は、まさしくいつもの栄だつた。やはり僕の見間違いだつたのだろうか。

「…………ん。分かつたよ。依頼という形で受ける以上、何らかの報酬があるのは、考えてみれば当然の事だつた」

「分かればいいさ。私も少し言い方が悪かつたようだしね」

「ところで栄、依頼を受けるのはいいけど、具体的にどうするつもりなんだ？さつきの話でも少し出てきたけど、部外者の僕達が入り込むのは少し難しくないか？いくら年齢的には問題無いとはい」「少しころか、とても難しいだらうね。次に会つた時に聞いてみないと分からないが、もしかすると彼女の学校は女子校かもしれない。そうでなくとも、学校といつ閉じられた空間は、異物を容易く発見、排除する」

「女子校なら僕にはどうしようもないね」

「…………ま、それはないだらうね。もしかうだとすると、いの一一番にそれは言つだらうから」

「…………大学ならまた少し話が変わつてしまつただけど。どうやって探すんだ？【何かよく分からぬるもの】を」

「…………ねえ、茉莉君」

「ん？」

「君はもう一度学校に通つてみる氣はあるかい？といつか通いたいかい？」

「何を言い出すんだいきなり。君にしては珍しく話が飛びね  
「話は別に飛んでいないよ。で、どうなんだい茉莉君」

「そりゃあ、通えるものなら通いたいけど」

「…………ふむ。ならそうしよう」「うう

「ちょ、ちょっと待つてくれ茱。通いたいからはいどうぞ、ってほど簡単にはいかないだろ? 家を借りるのとは話が違う」

「…………私の知り合いに、金さえ積めば何でも売つてくれる男がいる。そいつに頼めば、一週間もあれば転校手続きが整う筈だ」

「待つてくれ待つてくれ。通いたいとは言つたけど、そんなアンダーグラウンドな話はごめんだよ。危ないじゃないか、それは施設に居た時の知り合いだらう? 通報されておしまいじゃないのか?」「それは問題ない。確かに施設に居た時の知り合いだが、私の個人的な知り合いだ」

「個人的な?」

「ああ。いろいろ世話になつていて、効果の薄い薬を買つたりね。金がある限りはこれからも世話になるだらう」

効果の薄い薬?

「いやそれでも、だよ。その男が本当に信用できるか分からぬだろ?」

「少なくとも湊渡君よりは信頼できるよ。この家を借つるのにも一役買つてもらつていい」「うう

「湊渡さんよりって、まるで湊渡さんをまるで信用していなにような言い方じやないか」

「ようなも何も、私が湊渡君を信用している訳がない。当たり前じゃないか。初対面だよ？そこまで心を開ける君の方がおかしいと私なんかは思うけどね、茉莉君」

「でも敵ではないだろ？だから栄も依頼を受けたんじやないか」

「依頼を受けた事と、彼女が私達にとつて利益を与える人間か否かというのは全く別の問題だ。もし彼女が私達を陥れようと画策しているのだとしても、それを逆に利用してやればいい。伊達に3年間以上も自分を騙し続けていないよ、騙しあいは大得意分野だ」

初耳の情報が含まれていた。栄が【能力】を【発現】したのは、どうやら3年以上前らしい。

「それでもさ、彼女はいい人だと思うんだよ。嘘をつけそうな人は見えなかつた」

僕がそう言つと、栄はだらんとしていた姿勢を心持ち正して言つた。「ん、どうしたんだい茉莉君。今日の君はどうかしてるんじゃないかな？やけに彼女の肩を持つじゃないか。まさか本当に一目惚れしたとか言い出すんじゃないだろうね」

「違うよ。それを言うなら栄だっておかしいじゃないか。普段は色恋沙汰の話は全くと言つていいほど振つてこないので、今日はやけに話題にしている」

「する必要がないからしなかつただけだ。だいたい、あの場所を脱出してから関係らしい関係を持ったのは湊渡君が始めてじゃないか」「そうだよ！だから僕はせつかくの訪問者を無碍にしたくないと言つてるんだ」

「無碍になどしていないし、そういう話は今してないだろ？論点がずれている。彼女は「依頼者」なんだ。そこをずれて認識しては

いけないよ

「それだよ。その態度が気になつていいんだ」

「…………」

「今は依頼者かもしだいけど、同じ学校に通うのなら友達にもなるかもしないだろ？」

「………… 今度は何を言い出すんだ」

「まあ聞けよ。栄の言葉をさつきから聞いてると、そういう関係には絶対にならないと、信頼関係は築かないといつて見えてる」

「何を言つているのかよく分からないうが、その通りだよ。信頼関係なんて必要ない。私は未来永劫、知り合い以上の関係を築かないと決めたんだ」

「………… ジャあ僕はどうなんだよ」

「それを聞くのか。無粋な奴だな、君は」

「答えてくれよ。前から嫌だつたんだ。何だか軽く扱われているような気がして」

「どう扱われるのがお望みかはしらないうが、君ももちろん「知り合

い」の一人だ。それ以上でも以下でもない」

「それで君は寂しくないのかよ、栄！ その年齢で心を開ざすなんて虚しいじゃないか！」

「………… もういい。今日はここまでにしよう。今日君はやはりどこかおかしいよ。もっと理路整然として話してくれ。………… その君の今の状態が彼女の本当の【能力】なのかもしないね。粗つた男性を惚れさせるとか。は。下らない。本当に、実に、下らない」  
そういう残して栄は、別段怒った様子もなく、たんたんとして部屋を出でていつてしまつた。

## 17話 見つけて欲しいものー02

「ふむ、それじゃあ本当に手がかりの一つもないんだね」栄が「コーヒーをずっと、と飲みながら湊渡さんに聞いた。

時間は夜で、場所は適当に選んだファミレスで、湊渡さんは今日も制服を着ていた。学校が終わるのを待つてから集まつたのだから、当然といえば当然かもしない。十分家に帰るくらいの時間はあったと思うのだが、いちいち帰るのがめんどくさかつたとか、急な用事で予定より帰るのが。

「はあ、まあ、そうなりますかね～」

湊渡さんは髪をいじりながら答えた。

「それではさすがに困るんだけどね。確かに私達は何でも屋だけれど。手がかりの一つも無ければそれこそ手の付けようがない」

「そう言われてもですね～、本当に何も分からんんですよ～、でも私が【それ】を必要としているのは間違いないんですよ～」

少し申し訳なさそうに言う湊渡さん。

「……何故【それ】が必要なのかは分からないの?..」

黙つて一人のやりとりを眺めていたが、僕も会話に参加する事にした。

「いえ～、だつて【それ】が何か分かりませんから～、何に使う為に必要なかも分かりませんよ～」

まさしく埒があかない。こんな依頼を本当に達成できるのだろうか。

「…………少し方向性を変えようか。君は【それ】が今すぐ必要なのか、それともこれから必要になるのか、それは分かるのかい?」「それは……。う～ん。…多分もうすぐ必要になるような気がするんですけど～」

「何でそう思うんだ?」

「え～、それは～、何となくですか～」

「…………まあ、半歩前進といった所か。それなら次は…………最近身の回りで何か変化はあつたかい？」

「変化ですか？いえ、特にはありませんよ～」

「ならそれは現段階では見つけられないものなんじやないか？何かが起きてから、必要になつて始めて現れるものじやないのかい？」

？」

「いえ、それはないと想いますよ～。だつてもう何となく感じるんですよ～それが絶対に必要だつて～」

「何か分からぬのに？」

「はい～」

「よわつたな。ここまで何も分からぬとは思わなかつた。…………やはり実際に見て回るしかないみたいだね、茉莉君」

「そうみたいだね」

「はあ～、じゃあ先生方には私から言つておきますから～」

「その必要は無いよ。といふか湊渡君。君はそんな実態の掴めないものを一日や一日で見つけられるとでも思つてゐるのかい？」

「え～、どういう事ですか～？でも変な事すると通報されちゃいますよ～？うちの学校、最近不審者騒ぎが有つたから、その変は敏感になつてゐると思ひますし～」

「心配はありがたいが、私達は堂々と正面から学校に入り、その【何かよく分からぬもの】を搜索する」

「はあ～」

湊渡さんは明らかに困惑していた。まあそれはそうだね～。栄が、見せてやれ、といったように僕に視線を向ける。いや、だからせ、何でそこを僕に任せるんだよ。自分で見せねばいいじゃないか。まあ別に文句もないんで、僕はポケットから取り出したものを見せた。

「僕達は明日から、湊渡さんと同じ井上高校の生徒なんだ」

僕が出した学生証を、湊渡さんは事態がいまいち呑み込めないよう

で、ぽけーっと見ていた。

## 2章 井上高校 1話 転校生ー〇一（前書き）

主人公はあくまで茉莉と栞ですが、作品の進行をスムーズにするために、たまに視点が変わります。その時には、今回のように話数の前にマークをつけます。特に今回は、本作品のサブ主人公とも言える人間（前作でいう所の栞みたいな位置。どれくらい重要キャラになるかは未定ですが、栞と茉莉の学校での様子を、第三者の位置で見た場合のキャラです）なので、「」にしました。

主人公（茉莉または栞）はマークなし、サブは、それ以外はで  
いきたいと思います。

それではよろしくお願いします。

今日も、一日が始まる。

行きたくない学校に、それでも僕は行く。  
行かなければならぬのだ。

いつも通りに母親に挨拶し、靴を履き玄関を出る。

今日はくもりである。

もっとも、晴れても曇っていても雨が降つても、それこそ槍が  
降つても、僕には関係ないのだ。

機械的に僕は学校に行く。どうしても行かなければならない。負け  
たくないのだ。

つまらないプライドかもしけないが、学校に行き続ける事が、僕の  
示す意地なのである。

どうせ今日も、いつもと何も変わらない。

退屈で下らない、何の変化もない一日だと思つていた。

「おい、お前ら静かにしろー、今日はホームルームの前に、発表が  
ある」

一日がいつもと違う様相を見せ始めたのは、担任のこの言葉だった。  
朝からどこかダルそうな担任が、頭を搔きながら続ける。

「あー、先生も急すぎてまだよく分からんんだが、今日このクラスに転校生が一人くるらしい」

ざわつと教室全体がざわつく。

馬鹿馬鹿しい。高校生にもなつて、転校生くらいで、何故そんなに  
騒げるのか。

やはりここからは、馬鹿なのだ。馬鹿で馬鹿でたまらない、愚劣な

人種なのだ。

「おい先生よー、お前も分からないとかどうなつてんの?」この時期に転校生とかおかしくねー?」

僕の後ろから、男子生徒が聞いた。

「おい水木。みずき 何度言えば分かるんだ。仮にも俺は先生なんだから、敬語を使え!! ああもう朝からめんどくさい注意をさせるな」

「そんなら尊敬できるような行動取ってくれよ先生、何やつても適当じゃねーかお前」

「そんな事はないぞ。あーそれでだなー。うーん、そう言われてもなー、俺もよく分からんのだな、これが。聞いてくれよ、俺も今日校長に知らされたんだわ、これが。どう思うよこれ、水木」

「はあ? 俺が知るかよそんな事。それでどんな奴なんだ? 男か? 女か?」

先生と水木が、今日もいつものようにのしり合っていた。この二人は、先生と生徒とは思えないほどに仲がいいのだ。むかつくな事に。「あー両方だな」

「はあ? オカマかよソイツ」

「違う違う。男と女一人づつだ」

「そんなら最初からそう言えよ。そういうのが適當だつ一つんだよ」

「あー黙れ黙れ、どうやら来たみたいだからお前らちょっと黙れ」

クラスのざわつきは、次第に収まつていった。

何だかんだいって、このクラスの連中は、この適当な教師の事を気に入っているらしい。

そんな一切も、結局僕にはビリでもいい事だ。

「おい!...いいぞ!...入れ!...」

先生が大声で合図すると、教室のドアがガラリと開き、少し緊張し

ている男と、対照的にまったく緊張していなさそうな女が入って来た。

## 2話 転校生ーー02

「あーなんだ、じゃあ取り合えず自己紹介してくれるか、適当にでいいぞー」

先生がやはりダルそうに言つ。何故こんな先生が人気があるのか、理解に苦しむ。

「片瀬茉莉です。よろしくお願ひします」

男の方がそう言つた。やはり緊張しているようだ。何を緊張しているのだろう。馬鹿馬鹿しい。

「片瀬茉莉です。…………よろしくお願ひします」

女の方がそう言つてにこりと笑つた。

兄妹なのか。全然似ていなーいな。それにしても、同じ日に転校してくるのだから、何らかの関係性があるのは当然か。

「よろしくお願ひします」という言葉を付け足したのも少し気になつたが、それよりも俺の斜め前にいた女が、「えつ?」と驚いたような声をあげた事が気になった。

確か湊渡とかいう名前だったか。

ほとんど喋つた事もないでの、詳しくは分からぬが、この湊渡とかいう女は基本的に無口な奴だった筈だ。

その証拠に、今も注目を集めた事が恥ずかしいのか、俯いてしまつてている。

もう一つ気になる事があった。

転校生の女の方が自己紹介をした時に、男の方が驚いたような顔をした事だ。

その表情の変化は一瞬の事だったが、あれは見間違いではなかつた。

「席はまあ空いてる所に適当に座れ」

「馬鹿かよ先生ー。空いてる席なんぞねーだろーが」

「あんまり口が悪すぎる」と、俺も流石に見逃せないぞ」

「やー」で怒るぞって言わねーで見逃さないってーのがおめーらしー

な、先生」

「あーそりゃい。それじゃーとりあえず今田はそことやーこ座つと  
け。明日までに何とかするから」

そう言って先生が指差したのは俺の右横と、水木の左横だった。二  
人とも、どうやら今日は休みらしく、席が空いている。

男の方が、俺の横に座った。茉莉とか言つたか。

めんどくさいから、話しかけて来ないでほしい。妙な気をきかせて、  
話しかけて来るような奴だつたら困るな。

後ろの方の席では、栄とかいう女に、さっそく水木がなれなれしく  
話しかけていた。

何が嫌かといふと。

私が何が嫌かといふと。

それは簡単に答えが出る問題ではないような気がするが。

それでも私はこの水木という男が、どうも好きにはなれないようだつた。

私に対するみえみえの下心が嫌なのではない。

初対面なのに、やたらなれなれしく話しかけて来るその態度がいやなのではない。

先生、それ以前に年上の相手に対して、少しばかりの敬語も使えないその軽薄さが嫌なのではない。

授業中にも関わらず、質問を止めようとしないその傲慢さが嫌なのではない。

きっと単純に馬が合わないのだろう。

だれしもそういう人間はいるものだ。それも結構な頻度で。人が百人居れば、その中に3人ほどは、何となく気が合わない人が居る。だからこの男も、そういう人間の一人なのだろう。別段珍しくもない。

馬が合わない人間との付き合い方も、一通り心得ている。

相手が機嫌を損ねないように、相手が疑問に思わないほどに、適当に話を合わせていればいいのだから。

自分でもなかなかに出来のいいと思える笑顔を貼り付けたまま虚しい気分を終始抱えながらも、鏡の前で練習したかいがあつたというものだ。私は水木の質問責めを適当にいなしていた。

それでも今私は困っていた。

私達は、あまり目立つ訳にはいかないからだ。

せっかく自己紹介を無難にこなし、茉莉君も私の説得のかいあつて  
か、無駄にクラスメートに友達を求めるようとしていないというのに。  
これでは何の意味もない。

この水木という人間の、私という人間への興味を消失させる上手い  
方法でもないものだろうか。

怖かった。

こんな風な言い方は、かなりの誤解を含みそつだが、僕は何となく、

栄が怖かった。

否、やはり怖いという言葉は、適切な表現ではない。

栄が自分を守るために、もう一人の自分を作っている事は知つていてが、あんなにこやかな栄は、なんだろう、気持ち悪い？

そうだ、気持ち悪いという表現が好ましいかもしない。

さつきの自己紹介では、危つく声を出してしまった所だった。僕より先に湊渡さんが反応してくれたから、危うい所で声を出すのは踏み止まる事が出来た。表情はどうだらり、上手く隠せているといいのだけれど。

それについても、栄はあんなにこやかに笑うことが出来たのか。普段の栄は、ほとんど笑う事がない。というか、栄の笑顔を見たのは今日が初めてだったかもしれない。

例え作り物としても、あれは可愛かった。

「クラスで生活するに当たって、一番大事なのはとにかく目立たない事だよ、そちらくん君も徹底してくれ」と言っていたのはどの口だよ。転校初日から。実は栄は馬鹿なんじゃないのか？

目立つかどうかはこの際別にしても、先ほどから後ろの方で、さかんに栄に話しかけている男がいる。

その男に対して、栄が笑顔で受け答えをしているのを見ていると、何だかやはり怖かった。

あんなに人とは、変わるものなのだろうか。

一度、湊渡さんと田が合つた時も、湊渡さんはいかにも何かを聞きたそうな目だつたが、僕も何も分からないので、取り合えず首をかすかに横にふつておいた。

だからだろうか。

別の事に完全に意識がいつっていた僕は、隣りの 確か、えーと、名前が出てこないなさすがに、うーん、和田わだだつたかなあ？ 男が僕の事を観察するように、見ていた事に暫らく気付く事が出来なかつた。

「へーそれじゃあ、栞ちゃんは結構大きめの方なんだね」

…………何の話だろうか。

反省しなければならない。

この水木という男の話が、余りにくだらなく、どうでもいい内容だからと言つても、余りにも意識を他へと向けすぎていた。相手と話している最中に、進行中の話題を見失うなんて、失策も失策だった。

「…………そうですか？あまりそういう言われた事はありませんけど」とりあえず。

あくまでも取り合えず話題を合わせておく。無難な言葉で濁して、この後の反応で話題の方向性を見極めるとしよう。

…………それについても、会つて1時間にもみたないのに、もつ私は「ちゃん」付けで呼ばれているのか。

別に私は気にならないが、この軽がるしい態度は、男女問わず評価が分かれる所だろう。味方と同じ数だけ、敵もいそうなタイプだ。誰かと必要以上に親しくなるつもりはないが、この男とは特に親しくなるのを避けた方が無難なようだ。

彼もこういうタイプの人間はあまり好みないようだから必要ないとは思うが、後から茉莉君にもそのうまを伝えておこう。

「そんな事ないって

「そこ！五月蠅いぞ！」

水木の言葉を、先生が遮った。

しかし怒られたのは以外にも、私達ではないらしい。

“ひつやーり、茉莉君と、その横の和田君が怒られたらしかった  
……なるほど。面倒臭そつた教室に転校して来てしまったも  
のだ。

「？」

声には出さずに、和田君の方を見ると、彼は目線を外した。気まず  
そうな雰囲気はない。

「和田君……だよね」

「…………何で俺の名前を知ってるんだ」

視線を逸らしたまま、彼はそう聞いてきた。

「それは

しまったな。事前にクラスの名簿を手に入れて、名前をある程度覚  
えて来たなどと、言える訳もない。

「あ？ それはなんだ？」

「それはアレだよ。あの。先生がさつき言つてたんだ。お前は和田  
の隣りに座れって」

微妙に苦しい言い訳だった。

「あの先生がか？ 嘘だろ？」

何でこうもあっさり見破られるんだ？ 僕には嘘つきの才能が欠如し  
ているとでもいうのだろうか。

と思ったが、どうやらそうではないらしい。嘘だと見抜いた訳では  
なく、僕の発言の真実性を疑っているらしい。

「嘘なんかじゃないよ」

「そんな馬鹿な。あの出来損ない教師が俺の名前を呼んだだと？」

「出来損ない教師？」

「ああ、いや、なんでもない」

なんでもないって訳はないだろう。なんでもないのに、初対面の僕  
の前でこんなに取り乱すわけがない。

それは向こうも感じていたのだろう。バツが悪そうに言葉を付け足

した。僕にしか聞こえない程の小声で。

「………… そうだな。お前も覚えておいた方がいい。アイツはな、生徒のエコ巣廻が酷いんだよ」

「エコ巣廻」

「そうか。お前もせいぜい嫌われないよつて気をつけろといったな…… そんだけだ

「そつは言つても和田君…………」

「それと。お前の事は何だか気にいつたからこれも教えてやる。俺とはもう関わるな」

気に入つたのに関わるなとはどういう事だらう。

何故かは分からぬが 強いて理由を探すなら、きっと馬が合つたのだろう この和田という人間とは上手くやれそうな気がしていたのに、そんな事を言われると悲しいじゃないか。

「………… それはどういう事」

「そこ！ 五月蠅いぞ！！」

理由を問いただそうとしたが、その声は先生の怒声によつて搔き消された。

注意されたのは、どうやら僕たちらしかつた。

そんな馬鹿な。僕達を注意するのなら、それより先に、後ろの栄と

水木とかいう奴を注意すべきだらう。

なるほど。面倒臭そうな教室に転校して来てしまったものだ。

当然のように、何事もなく僕の記念すべき?井上高校での一日目は終わった。

これから湊渡さんの【何かよく分からぬもの】を探すのだから、これから何がが起こるかもしれないが、とりあえず授業は何事もなく終了した。

「茉莉君」

と呼びかけられたものの、僕は呼びかけて来たその声が、誰のものなのか直ぐには分からなかつた。分からぬというより、判断がつかなかつたという方がより正確だろう。

というのも、聞いた事がないような声だつたからだ。

否、聞いた事が無いというのは的外れもいい所だらう。何せ、この声の主と僕は「知り合い」なのだから。「知り合い」と「友達」と「親友」との境界線は、どの辺りにあるのだろう。彼女と僕が「知り合い」程度の新密度しか持たないのだとすれば、僕には「友達」と呼べる人間がいなくなつてしまいそうだ。彼女が何と言つたつて、僕は彼女を「知り合い」だなんて他人行儀な枠に当てはめて置きたくはなかつた。

だつて彼女の行使するその理論でいくと、

強力な【能力】の【代償】として体に不思議な穴を持つ彼も、見たくも無いのに他人の心を見る事が出来てしまう彼も、簡単な範囲に限るが、自分の未来を選ぶ事が出来る彼女も、その他のあの場所で出会つたみんなも、

「友達」ではなく「知り合い」という事になつてしまつ。

そんなのは、あまりにもあまりにも、寂し過ぎるじゃないか。

あの日。といつても一週間程前だが、栂と軽い口論らしきものを交わした日から、僕と栂の間には確かに溝のよつたものがある。予想通りというべきか、次の日の朝には何事も無かつたかのような態度で栂は話しかけてきた。だから僕も自分を誤魔化してしまってなるが、確かに僕らの間には溝が空いてしまっていた。

否。違うのだ。そうではなく、溝はある時「空いた」のではなく、もともと「空いていた」のだ。栂の心に確かに近付いたと思ったのは、全て幻だったのだ。僕の勝手な一人よがりだったのだ。

「…………おい、茉莉君。考え方は家に帰つてからにしないか」少し低い、僕にとっては聞きなれた声が、耳元でした。

「…………あ、ああ。「ごめん。で、どうしたの?」

栂はじとじと僕の事を少し睨んだあと、またあの聞き覚えのない声で言った。

「あのね、水木君が「みんなでカラオケにでも行かないか」って、歓迎会を開いてくれるんだって。茉莉君はどうする?」

栂はそこで声の大きさを落としてさらに続ける。

「できれば「ごめん被りたいけどね」

どうやら栂は、学校では徹底的に仮面を被り続けるつもりしかつた。

「で、どうするの、茉莉君」

言葉には出さないが、田で「是非とも断つてくれ」と訴えてくる栂。アイコンタクトが出来る程には仲がいいのに、それでも僕らは、どうしようもなく「知り合い」なだけだ。ああいけない、考え込むのもいい加減にしておかないと、栂の後ろでにやにやといけ好かない笑みを浮かべている水木にも、変に思われてしまつ。

「普通の、平均的な一般生徒を演じる事」

栂に繰り返し繰り返し警告された事だ。栂自身がもうすでに守れない这样一个気がするのだが、それはそれでおいておくとしよう。

「じゃあ、行こうかな」

と僕が答えると、栂はあからさまに不服そうな顔をした。……家に帰つたら、栂に注意してあげた方がいいかもしない。そのキャラを押し通すのなら、何処で誰が見ているかも分からないのに、そんな顔をするな、と。

栂の反応は予想通りだつたが、もう一人予想通りの反応をした奴がいた。水木だ。僕が行くと言つと、明らかに嫌そうな顔をした。どうせ、僕が行かないといえば、栂を口説く事に全力を注いでいたのだろう。「みんな用事があつたみたいでな、悪いけど、これだけしか集まらなかつた」とか言って、栂の周りを奴の手下だけで固めるつもりなんだ。

…………とかまあ、ろくに話した事もない人間をそんなに悪く言うのもどうだろ。でもまあ、アイツを僕は嫌いだ。初対面なのに、何故か嫌いだつた。自分でも珍しいと思うが、どうしようもなく、

この水木という奴とは気が合わない予感がする。

水木以外の視線をふと感じたのでそちらを向くと、湊渡さんが心配そうに、何かを言いたげにこちらを見ていた。

「でも茉莉君、引越しで」たこたしているし、今日は早く帰りうといふ話だつたじゃない？」

もちろんそんな話はしていない。よっぽど行きたくないのだろうか。栄がこの男の事を良く思っていない」というのは、僕にとってはありがたい情報だつた。

「それは別に明日以降でも問題ないとも話した筈だよ、栄。せっかく誘ってくれてるんだから、行こうよ」

栄を見習つてといふ訳でもないが、僕も作り物の笑顔を貼り付けて答えた。

どうせ僕の返事がイエスでもノーでも、栄は無理矢理参加させられるのだ。僕が行かないという選択肢はない。栄の事だから心配ないとは思うが、万が一という事もある。それにこれは今日何となく思つた事だけれど、今の作つてある方の栄は　　というよりも、栄自身が本当は人付き合いに慣れていないんじゃないだろうか。栄にとつて人と話すといふのはこれまで、あくまで実験の一部であつたんじゃないだろうか。だから、こんな風に話している栄は、かなり危ういような気がする　　まあどちらにしろ、僕はついていく事に決めた。

結局。

半分は想像通りに事が進んだ。

歓迎会に参加した人間は、僕と栢を含わせて15人だった。総勢40人のクラスだから、これはかなり多い方だと思う。何しろ、僕達が今日転校して来る事は、今日の今日まで誰も知らなかつた筈だ。それ以前から別の予定が有つた人間は当然来れないだろうし、僕達に興味が無かつたり、そもそもこういう集まりが嫌いな人間のことも考えると、やはりかなりの人数が集まつている。

「よかつたあー。栢さんを一人で行かせるんぢやないかつて、私ひやひやしたよおー…………あのー…………氣付いてると思うけど……水木君には気をつけた方がいいよおー。あ、もちろん茉莉君が、つて事じやないよー？…………あのー…………何でいつたらいいのかなー、ほらー、水木君つて、そのー、カルいからあー」

カラオケで盛り上がる中、湊渡さんがそう話しかけて来た。僕としては、湊渡さんが参加した事が意外だつた。それは水木も同じだつたようで、一応という感じで聞いたのだろう。湊渡さんが参加の意思表示を見せた時、「え？ 来るの？」と思わず言つてしまつたのが聞こえた。もしかするとこれを伝える為に参加してくれたのだろうか？…………さすがにそれは都合よく考え過ぎか。

水木は、ちゃっかり栄の横の席に座っていた。栄は笑みを貼り付けたまま対応しているが、あれはどの程度本心からの笑顔なのだろうか。

僕としては残念な事に、和田君は参加していなかった。意図的にか、ただ単に忘れていたのか、水木が誘わなかつたので、変わりに僕が誘つたのだけれど、「誰が行くかよ」とにべもなく断られてしまった。

閑話休題。

いや、明らかにこちらの方が本題から外れる話なのだけれど。

僕は栄がどんな歌を歌うのか、とても気になっていた。

「それで? どうだつたんだ?」

電話の向こうから、僕の友達——否、親友と言つてもいいかもしない——がそう言つた。でも親友だと思っているのは僕だけで、結局彼も、僕の事を知り合い程度の関係だと思つていたりするのだろうか。他人の考えている事なんて、分かる筈もないのだから。そういう風に考えていくと、もう誰も信じられなくなりそうで、僕はなんだか虚しい気持ちになりつつ答えた。

「どうつて? それは何についての「どう」なんだよ、英知<sup>えいち</sup>」

英知は、栢と同じ場所で出会つた、僕の「親友」だ。僕にとつて気の置けない、数少ない人間の一人だ。最も、僕はある場所以前の記憶がいまいち曖昧なままだから、僕にとつては友達どころか知り合いも少ない人数しかいなかつたのだ。これまで。それが今日一日で一度に増え、急激な環境の変化に、僕は今少なからず困惑しているのだろう。

「いや、この場合は一つだろ、お前がわざわざ本道をそれでまで気にしてた事だよ。栢は何を歌つたんだ? 僕だつてそれは気になるよ。お前の話を聞いても、あの栢がにこやかに笑つたなんて、これっぽつちも信じられないんだからな。実際に見るまでは」

英知とは、今でも定期的に連絡をとつてゐる。あの場所を出た後、直接話したのは今の所英知だけだが、三人ともそれなりに元気にやつてゐるらしい。生活資金や住んでいる場所など、個人的な情報を聞くと言葉を濁すのが少し気になる。悪いことをやってなければいいのだけれど。

「それなら直接会つて確かめればいいじゃないか」

「まあ気が向いたらな。それより話を逸らさうとするなよ。栞はどういう歌を歌つたんだ」

いつもこうである。会つという話や、他の人間に電話を変わつて欲しいという話になると、ふと話を変えてしまつ。何か会えない理由があるのだろうか。フォリス（ふおりす）は今は仕方ないとしても、頬姫君（えいひめくん）にも変わってくれないというのは、どういう事なのだろうか。でも僕は臆病だから、その理由を聞かないでいる。聞くと何か悪い事が起こつてしまいそうな気がして、聞けないのだ。

「歌わなかつた」

「え？」

「だから歌わなかつた」

「何でだよ。その水木とかいう奴がマイク薦めたんじゃねーの？」

「いや、まあ薦めてたけど、何か栞が頑なに拒んでた」

「あ、何で」

「知らないよそんなの。よっぽど歌いたくなかったんじゃないの？僕もさりげなく進めてみたけど、もの凄い笑顔でもの凄く睨まれたよ」

「何だよもの凄い笑顔つて。もしかしたら栞つて、とんでもない音痴なのかもしねないな。それもまたおもしろそうだ。…………それでお前は何を歌つたんだ？俺はむしろそっちの方が気になるかもしない」

「…………た」

「え？ 聞こえないぞ？」

「…………歌わなかつた」

「何で？」

「僕は音痴なんだよ！－悪かつたな！－」

「…………いや、別に、悪くはないけど。あはは。そつか茉莉おまえ。そうかそうか。くく。これはいい。音痴コンビか」

「栞が音痴とは限らないだろ！－」

「あはは。怒るな怒るな。人には欠点の一つや二つや三つや四つ、あるもんだぜ？」

「欠点とかどうでもいいんだよ！－！栢が歌わないもんだから、その分の矛先が全部僕に回ってきて、断るの大変だつたんだからな！－！」

「…………それはお前。それこそ栢に直接文句言えよ。俺に愚痴をぶつけられてもなあ」

「…………栢には、言えない」

「何で？…………ああそうか」

僕は何も言つてないのに、英知は何かを納得した。

「何を納得したのかは分からぬけど、最近栢と変な感じなんだ」「ふうん。喧嘩もしたか？それはお前が謝つておけ。お前が悪くなくともだ、茉莉」

「喧嘩、つて感じではないんだよ」

「じゃあどういう感じなんだよ。もうちょっと情報をくれないと何もわからんねーよ」

「僕の事は「知り合い」としか思つてないって言られた」

「…………。それは、どうこいつ会話の中でも言われたんだ？」

？

それは、と、僕が説明しようとするが、電話の向こうが急にぱたぱたし始めた。と、焦つたような英知の声が響く。

「わりい。ちよつと切る。またかけ直すよ。続きはまた今度話してくれ」

くれ

別れの言葉をかける間もなく、電話は切れてしまった。

僕は何だかもやもやしたまま、しばらく立ち尽くし、やがてベッドにぼふと倒れこんだ。

ねそぬそ、と、こうよつた表現しそうに気持ち悪い感覚の中で目が覚めた。

なんだらう、この感覚は、ああそうか分かった。これは寝すぎた時の感覚なのだ。

眠りすぎて、起きてしまは、頭も体も、上手く回らない。

何となく僕は目覚ましを見る。

短針が11時を指していた。

……11時。

11時？

11時！？

遅刻じゃないか。栄も起こしてくれればいいのに。昨日マイクを薦めたのをそんなにも怒っているのだろうか。それとも怒っているのはその前の事か？つまり、僕が問い合わせた彼女の「知り合い」発言についての事だけれど。

いやそれこそないだらう。いくらなんでも、そこまでひきずるような彼女じゃない。…………のか？僕が栄の何を知っている？僕は彼女の「知り合い」に過ぎないのだから。本当はあの発言にそれなりに怒っていて、僕を起こさなかつたんじやないか？

そうじやないそじやない！！！そういう事じやないんだ今は！！

遅刻だ！！2日目にして！！盛大に！！

僕ががばりと起き上ると、僕の体の上から何かがずるつと滑り落ちた。

昨日僕は寝る前に、何か置いたらどうか？とにかく寝かつたからよ

く覚えていないが、置いていなければ。じゃあ何だ?いやどうでもいい。急いで準備して学校に行かなれば。

僕はベッドの横に落ちたそれを、一応一日確認して、ドアへと向かおうとした。が、僕はその落ちたものを見て、それまでの動作を完全に取りやめ、不格好な姿勢で固まつた。

「……………栄?」

栄が、頭を抑えながら起き上がる。

「……………どうして君は、寝起きからそんなに活動的なんだ」

「……………遅刻しそうだったから……………というか、栄こそどうしてここに」

「遅刻なんか別に気にしなくてもいいだろ?あの学校にはそれほど長い期間いないんだから。私なんかは、君が一日で学生生活に溶け込んでいる事のほうが不思議だね」

「……………栄は何でここにいるの?」

「……………君は一応あの男の実験体だったからね。不特定多数の人間に接した事で、何か変化が生じるかもしれないと思つて、観察していたんだ」

「観察なんてしないで、僕に直接聞けばいいじゃないか。何か思い出した事はないか、とか。答えるよそれくらい」

「……………別にね。それだけが理由じゃないんだが……………」

「……………ないんだが?」

「……………言つ必要がないから言わない」

「なんだよそれ。教えてくれよ」

「それを私に聞くという時点で、君はもうとっくに駄目なんだよ。

……さあ、朝食兼昼食にしようか。学校には昼からいけば十分だ  
うつ

栄が部屋を出て行く。

何だよそれ。

転校2日目から学校を休むとは、馬鹿なのかそれとも何なのか。まあきっと馬鹿なんだろう。それにしても二人とも、か。昨日のカラオケで何かがあつたのだろうか。まあそんなのはどうでもいいことだ。

今日もやっぱり学校は下らない。  
いつものように、やっぱり下らないのだ。

何も代わり映えのしない午前の授業が終わり、昼からも何も特別な事は起きないのだと、

考えるでもなく昼食を自分の机で食べていた。  
教室の後ろの方は、やはり今日も騒がしい。水木を中心に、また下らない話題で盛り上がっているのだろうか。だがアイツが普通に学校に来ているという事は、やはり今日転校生の二人が来ていないのは、一人自身に何か問題があつたのだろう。

…………カラオケで爆発事故でもあればよかつたのだ。

そうすれば、この下らない日常が変化するばかりか、このクラスの大半のどうしようもない人間どもが怪我を負うなりしていった筈なのに。いや、自分の考えの中で遠慮する必要はない、それこそあいつらが死んでくれていたかもしねなかつたのに。

もくもくと食事を続けていると、ギーといつ音がすぐ近くで聞こえた。

横目で見ると、どこかバツが悪そうにしながら、茉莉とかいう転校生が、席に座る所だつた。

ふーん。来たのか。昨日何かがあつたわけではないのか。

なんにしろ水木と昨日一緒に行動したのだから、昨日のうちに俺についてある事ない事吹きこまれている筈で。つまりもう俺に話しかけてくる事もない筈だ。別にどうという事もない。いつもの事だ。

しかし茉莉は、

「今日の昼からの授業つて、何だつたかな？」  
と話しかけて来た。

何だコイツは。

人は他人にほとんど興味がない。

学校に昼から登校するという件について、茉莉君は「いつそそれなら休んだ方がいい」とか何とか訳の分からぬ事を言つていたが、どうという事はない。私の予想通り注目らしきものを集めたのは教室のドアを開けたその瞬間だけで。それにしたつて「あ、来たのか」くらいのものだ。ちらりとこちらを見た後、各人それまでしていた事に取りかかる。友達と話していた者はその続きを。次の授業の宿題を移している者は机へと視線を戻した。机に突っ伏して寝ていた者は、こちらを一瞥すらしていない。

人は他人に興味を示さないのだ。なによりもまず自分の事。自分が満たされて始めて周りに目を配る余裕が出てくる。だから——だけど——私は「茉莉」という人間にここまで興味を示しているのかもしれない。彼は変人だ。いろいろな意味で。だが変人でなければあの場所から生還する事など出来なかつた。個々人が得体のしれない【能力】を持つあんな場所で、全員とそれなりに心を通わせていた。少なくとも通わせていていたようには見えた。本当の所はどうなのか私にも分からぬけれど。

つまり。結局人間は自分さえよければいいのだ。こんな風に決めつけると、あの変人はまた文句を言いそうだが、これは事実そののだ。あの場所で色々な人間を観察して来た私が弾き出した一つの真実。例外としては、親族や恋人、或いは——

「ああ来たんだね、桑ちゃん。なれない環境で病氣にでもなつてな

いかと心配したんだ」

例外の一つが話しかけてきた。例外とはつまりその人間に興味を抱いている人間だ。この水木の場合は私に対する明確なまでの下心。

――何故こんな人間が人気なのか。

分かつている。人が人を慕うのは、純粹な尊敬以外には、金、権力、力。或いはそれら複数。

昨日のカラオケを全員分奢っていた事からも容易に想像がつくが、この人間は金と、おそらく権力を持つているのだ。

「ちょっと昨日は疲れちゃって。寝坊してしまったみたい」自分で話していく、果たしてこれは私なんか分からなくなる。また「私」は「わたし」を作り始めているのかもしれない。まあまだ2日目だ。徐々にならしていかなければ。

「昨日は楽しかったね。また行きたいな。できれば今度は一人きりで」

気持ちの悪いウインクとともに水木がそう言つ。どうやらこの男の事は、根本的に好きになれそうにない。

「そうですねえ」

私らしくもないが、曖昧に語尾を濁した。或いは湊渡君の口癖が移つてしまつたのかもしれない。このいけ好かない男と二人きりなんてごめんだが、敵としてみなされるのは得策ではない。

「ところで茉莉ちゃん。茉莉君、だつけ？君の弟だけど、なんで和田なんかと話してるのかな？もしかして昨日の俺の話聞いてなかつたのかな？和田はろくでもない奴だから話さない方がいいって遠回し

に警笛したつもりだつたんだけど。——「ひ思ひ、栄ちゃん？」

顔は笑つてゐるが目が笑つていな。

「そんな事私は知らない。彼は変人だからね」と答へたい所だが、一重の意味でそういう訳にもいかないようだ。  
まったく、あの変人は。

やはりどうしようもなくトラブルメーカーらしい。

「ないですねえ～」

図書館、焼却場、各教室など、まあそれなりに探してみたが、何も見つからなかつた。

そもそもその程度の所はすでに湊渡さん自身で探しているのであるうし、探索一日目の今日のこれは、いわば下見だつた。湊渡さんにようじゅくたちへの学校案内とも言い換えられるかも知れない。

「ま、妥当な結果だらうね。今日一日で見つけられるなんて、もともと思つていらない訳だし」

「どうかな湊渡さん、あらためて学校を見てみて、何か思いつく事はない？」

「ん～、分かりません～」

「逆に探してない場所とかは思いつかないのかい？」

「え～、それはたくさんありますよ～、校長室とか～、男子トイレとか～」

湊渡さんがそうこうつと、栂が少しあきれたように聞き返す。

「君の探していくる【何かよく分からぬるもの】といつのは、男子トイレで見つかる可能性のあるものなのかい？」

「え～だつて栂さんが探してない場所つて言つたからあ～」

「まあそれは後から茉莉君に確認してもらひうとして、それとは別に湊渡君に聞きたい事があるんだ」

「なんですかあ～？」

「和田君と………それから水木君の事なんだが

栂がそういうと、湊渡さんは少しだけ苦い顔をした。

「ああ～、そのお～、あの一人は～、ところより和田君は～その～

あの～、分かりやす～いとお～、こじめられてるんです～

「えー？」

「……………やはりか」

その言葉に対する一人の反応は正反対だった。

「で、でもさ。全然そんな風に見えなかつたよ? どちらかといつて和田君がみんなを避けていたような」

「君はやっぱり馬鹿だな。なんで嫌つてている相手に好かれる必要があるんだい? 嫌いたいやつには嫌わせておけばいいんだ。……私が見た所、君は水木の事が嫌いだろう?」

「そんな事は……会つたばかりだし……なんとも言えないよ」

「…………前から言つべきだと思つていたんだが、君はいささかお人よし過ぎる。悪く言えば、誰からも嫌われたくないんだ。だから基本的に誰も嫌いたくない。そ娘娘う?」

「…………わざわざ悪く言い直す必要がどこにあるのか分からぬけれど。…………確かに、僕は誰も嫌いたくないし、誰からも嫌われたくないかもしれない。でもそれは」

それは何だらう? その後に続く言葉が、直ぐには浮かんで来なかつた。もしかすると、栂の言つ通りなのかもしれない。

言葉に詰まつた僕を、観察するように眺め、栂はクラスで振りまい

てゐる、あの僕から見ると気持ち悪い笑顔を作り、続きを促す。

「それは?」

「…………それは。…………その」

「ふふふ。まあそれは今はいいよ。でも茉莉君。その事に対する君なりの「答え」は出しておいた方がいい。それで湊渡君。水木君はクラスで好かれているかい?」

「ええ~! ?とお~それはあ~んん~?」

急に話を振られて、湊渡さんはどきまきしながら考えている。

「そんなに難しく考える必要はないんだ。なんとなく、雰囲気で言つてくれればいい

「ん~どうだらう~」

「言つておくけど、人が周りにたくさんいるからといって、それがすなわち好かれている事にはならないからね」

「ん~、好かれて、いや、ん~、難しいなあ~」

「なら君はどうなんだい?」

「私は~、好きではないかな~、でも別に嫌いでもないから~」

後の嫌いではないというのは、慌てて付け加えたようにも見えた。ここが学校の廊下だという事をふと思いついたようだ。放課後とはいえ、こんな場所では誰の耳があるか分からない。栄はちゃんとその辺分かつてているのだろうか。

「まあそんな所だろ~。ああこいつタイプは、味方と同じくらいの敵を作るからね」

「ちょっと待つてよ栄。何だか話が逸れてないか? 和田君がいじめられてるっていうのはどういう事なんだ湊渡さん?」

「ん~さつきはああ言つたけど~あればいじめといつか~、う~ん」「誰も積極的に関わろうとしないんだろう? 水木君が嫌つてるからとかそういう理由で。だから結果的に孤立している。違うかな湊渡君」

「だいたいそんな感じですね~」

湊渡さんがそう答える。僕の理解が遅いのか、栄の理解が早すぎるのか、それはよく分からぬけど、栄が小さく

「……めんどうだな」

と呟いたのが聞こえた。

「…………何もない」

声に出した所で、何かが変わる訳でもないのだが、何となく声に出して確認してみると、やはり何もないことが確認できた。

もともと僕は独り言が多い方だとは思うけれど、最近は特に増えて来たようと思う。んー、悪い傾向なんだろうなあ。人がいる場所で喋らないから独り言なのだろうし、別に直そうとも思わないのだけれど。だいたい意識している時点でそれは独り言ではないのではないかという、そもそも意味が分からないうえに、明らかに間違っている考え方を、僕はあわてて取り止めた。

だいたい。

栄に弱みを握られているという訳でもないのに、なぜ僕はこんなにも頑張っているのか。確かに湊渡さんの【何かよく分からぬもの】を見つけてあげたいという気持ちはあるが、僕だけがこんな苦労をするのは割りに合わないのではないか。

なんとなくいろいろした気分が消えないまま、僕は3階の男子トイレから出た。てっきり冗談だと思っていたのに、まさか本当に探す事になるとは。栄は栄で、やっぱりどこかずれているんじゃないかなと思う。

といふか。もう高校生だから、男子トイレにくらい平氣で入れるだろうに。今は放課後で、生徒もほとんどいないのだ。何を一人とも小学生みたいな事を言つていいんだ。今の世の中、男が女子トイレに入るのは犯罪だけど、女が男子トイレに入ったくらい、往々にして許されてしまうのだ。ましてやここは学校だから、見つ

かつた所で教師の指導へらいで済むだろ?」

そりやつて僕が、どこにぶつけいいか分からぬ怒りをこねぐり回していくと、向こうから栄と湊渡さんがやって来た。あの二人は校長室を探していらっしゃい。そっちの方がよっぽど危険じゃないのか?

「…………どうだつた?」

僕の怒りを、栄たちにぶつけるのは見当外れもいい所だと、本当は分かつていてから、僕は怒りが声に出ないよう勧めて聞いた。

「何もなかつたと思うよ。絶対無いとは言い切れないけど、でもそれを言つと他の場所も全部そうだから、茉莉君の方は?」

「何も無い」と思つ。男子トイレにあつておかしいものは何も無かつた

「ん~、やつぱり物じやないのかな~?」

「何とも言えないけどね。それは湊渡さんにしかきつと分からぬし」

「そりかな~、まあとりあえず今日はありがと~」

「ん、まあぼちぼち探していけばいいと思つよ」

するとふいに、僕と湊渡さんが情報交換をしているのを黙つて見ていた栄が口を開いた。

「…………む。茉莉君、何か君、怒つていてるのかい?」

栄が全部の男子トイレを探せとか言つからだろ?といつ気持ちと、なんで分かつたんだろ?という気持ちが同時に沸き起つて、結局僕はその栄の問いかけて、上手く返答できなかつた

最後の一口をぐいと飲みきり、ことりとカップをテーブルにおくと、栄がふと思いついたような口調で、とんでもない事を言った。否、とんでもないというのは僕だけの事で、栄にとつてはそれこそ何でもないことなのかもしれない。だつて栄にとつては僕でさえ「知り合い」なのだ。そんな考え方の彼女にしてみれば僕が示す反応の方がおかしいのだろう、きっと。

「あーそうだ茉莉君。君、和田君とはもうあまり喋らない方がいいよ」

「な……にを、言つてるんだ？ 栄？」

「何つて、言葉の通りの意味だよ。だいたい君は馬鹿じやないのか？ 湊渡君は別として、私たちは必要以上に誰かと関わる必要はないんだ」

「…………ちょっと待つてくれ栄。そう待つてくれ。そうじやないんだよ。僕が言いたいのは——」

「分かつていてるよ」

ぴしゃりと、真剣な目と口調で栄が僕の言葉を遮った。

「分かつているさ、君の言いたい事くらい。君は何か最近勘違いしているようだけど、私だつて鬼じやないんだ。きちんと人間らしい感情も持つていてるよ、一応ね」

一応、と付け加えた時に、少し悲しそうに顔を伏せたのが僕の見間違いでなければいいのだが。それともやはりそれは、そうあつて欲しいと願う僕の心が見せたものなのだろうか。

「でもそれでも、だ。履き違えてはいけない。私達の目的はあくまでも、湊渡君の【何かよく分からぬもの】の捜索なんだ。和田君と水木君との間にある何かしらのわだかまりを解消する事ではないんだ」

「何を言つてるんだ？ 分からないよ、栄。わだかまり？ 何の事だよ。

何でそれが話しちゃいけないなんて事になるんだよ……」

「何をここまで憤つてているのか正直分からないが、当然だろ？人間ほどめんどくさい」「物」はないんだ。わざわざその争いに首を突つ込むのは危険だよ。私たちは間違つても目立つ行動をしてはいけないんだ」

「違うよ……それでもそれは違うよ栄……！」

「違うわない。君は…………君も本当は分かってるんだろう？あの水木君という奴はやっかいな事に、金とそれなりの権力を持つているんだ。そんな人間に敵対する行動を取るのは得策じゃないと、そう言つてるんだ、私は」

「だからと言つて…………」

「そういう所だよ、結局。学校でも少し言つたけど、君は必要のない人間まで助けようとすると。たとえ和田君を誰にも気づかれないようにはじめから救う事が出来たとしよう。でもそれは何の解決にもならない。次の人間がいじめられるだけだし、その標的が私たちに向く確立はそれなりに高くなる。私達は転校生なんだ。そんな異物をあの水木君が見逃しておくとは思えない。それに彼はどうやら

「

「?どうやら?」「?

「あー、いや、何でもない。どうでもいい事だ」

「…………とにかく。和田君を救うのをどうでもいいと言つたのは取り消してくれ……！」

「はあ？妙な部分で絡んでくるね。まさかこんな短期間で、彼に好意を寄せているのかい？」

「そんな事関係ないだろ？」「

「関係ない訳ないだろう？君はアレだな。本当に最近考える能力が低下したんじやないか？湊渡君に何かされてないか、もう一度思い出してみるといい

「何もされてないよ……！」

「あーもういいもういい。これ以上面倒事を増やさないでくれ。話

を変えるよ。私の勘違いであつて欲しいのだけれど。学校を探索している時にね、ずっと誰かに見られてるような気がしなかつたかい？」

## 18話 謎の視線？ -02（前書き）

長らく更新せずにすみませんでした。

今は【世界の狂う重さ】の方を直していくので、これからも少しおかしなかもしません。遅れるかもしれません。実に申し訳なく思います。

【世界の狂う重さ（追加改悪版）】は、ほぼ書き直しきらこの勢いですでので、その間よければそちらをお楽しみ下さい。

見られていくような気は、別にしなかった。

改めて思い出してみて、例えあの時氣を抜いて、あるいは逸らしていたとしても、

何かを見つけようとしていたのだから、それでもある程度は張り詰めていた。ようと思う。

何度も考えてもやっぱり結論は、

「……特に見られていた記憶はなかった」

に落ち着く。

「……そつか。だとすると……ああもつやれやれ実際にめんどくさい事になつて来そうだな」

「めんどくさい？」

「そうだよ。実際にめんどくさい事、だ」

「……ごめん。よく分からんんだけど」

「…………まあその方が君らしいね。その前に片付けておくと、君が気配を感じなかつたという事は、大きく分けて三つの可能性がある」

「三つ？」

「君の【能力】のせいで、その監視していた人物の隠匿【いんとく】性が高まつてしまつた、という可能性がまず一つある。これはあくまでも私の予想の域を出ないんだが、多分君は【能力者】と言えばそれと分かると思うよ。分からなくとも、何となく他の人と違うと感じる筈だ。まああくまでも私の観察してきて出した一つの予想ではあるんだけれど

「そつかな？」

自分では別に意識していなかつたから、分からなかつた。でも文字通り短く無い時間僕の事を「観察」してきた栞が言つのだから、そなのかもしれない。

「そうだよ。そんな必要以上に敏感な君だから、もし【能力】を使って監視されたりすれば、気付く筈なんだ。まだその【能力者】が持つていなかつた余計な部分を君が引き出したりしていない限りはそんな事を言われても知らない。僕は何もしていないのでから。

「二つ目は、私たちだけを監視していた可能性だ。私は別に感覚が強化される訳ではないから、私が気付いたという事は、君によって強化されているという一つ目の説は薄いかもしない」

監視はされていたのか。というか栄はそう思つてゐるらしい。

「で、三つ目は？」

「うん」

「いやうんじゃなくて」

「一つ聞くけど、君からみて私は可愛い部類に入るのかい？」

「はあ？」

「何をいきなり。新手の自慢か？ 自画自賛か？」

「どちらかと言えば、でいいんだ。どちらかと言えばかわいい方かい？」

「そうだね。どちらかと言えば」

割と真剣に悩んでいたしかつたので、正直に答えた。

否、正直ではない。正直に言えば、とても可愛い部類に入ると思つ。「まあ君がそういうのなら、少なくとも外見はそのなのだろう。という事は、一番避けたい可能性の芽が大きくなつてきた」

「だから何なのさ、その三番目つて」

「どうやらあの水木君とかいう男は、私の事が好きらしい」

そうかもしれない。あれだけ積極的に向こうから話しかけているのだから、まあほぼ間違いないだろう。知らないけど。  
「だから？」

「うん、だからね、三番目の可能性とは、普通の人間が私を監視していたという可能性だ。それなら君が間抜けにも気付かなくとも当たり前だし、その場合、監視というよりも尾行と言つた方が正しい

かもね

と、栄は普段と何ら変わらぬ様子でそう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5840i/>

---

学校の転む重さ

2010年10月12日01時13分発行